

【84】大学の都心回帰

高度成長期に大都市が急拡大していく中で、市街地に広い敷地やキャンパスを有する工場や大学は、邪魔物扱いされました。

法律まで制定され（いわゆる「工場等制限法」）、工場や大学の新增設は制限され、既存の工場や大学は郊外や地方へ移転することが奨励されたのです。

この政策の下、多くの東京の大学が新天地を求めて、東京都下の多摩地域や周辺の県へ移転しました。

とくに多摩地域の中核都市の八王子市（現在人口 58 万人）には 20 以上の大学や短大が移転しました。中でも公立の「東京都市大学」、私学の「中央大学」は最大手で、いずれも大学本部ごとそっくり移転しました。

ところが、一昨年（2019）の 4 月、中央大学の法学部が、八王子を脱出して、古巣の神田駿河台の地から遠くない文京区に新居を構えたのです。

中大はもともと法律学校としてスタートし、法学部は中大の歴史と伝統の要ですから、大学本部をさしおいて単独で都心へ回帰したというのはちょっとした話題になりました。

東武鉄道スカイツリーライン日光線の、浅草から 70 km ばかりの群馬県板倉町に「板倉東洋大前」駅があります。

その名の通り、ここには東京の文京区白山に本拠地のある「東洋大学」の学部のいくつかとそのキャンパスが設けられました。平成 9 年（1997）のことです。

ここは町に隣接する渡良瀬遊水地に流入する板倉川や板倉沼にはさまれた一大湿地帯でしたが、沼を埋立て、東洋大学ばかりでなく大規模ニュータウンが建設され、東武線に新駅が設置されるなど 10 年以上を要した大規模な開発が行われました。

低湿地の開発というので、当時の河川局も治水面の検討に加わり、大規模な防災調節池が沼を利用して設けられました。

調節池にふだんも少し水を張り、ピロティ建築で大学の食堂や図書館を設けようという「水上大学」の案もあったのですが時代を先んじすぎて実現しませんでした。

このニュータウンのシンボリック存在だった東洋大が板倉町を出て都内やより便利な他市へ移転するので、用地取得に協力し補助金まで出した群馬県は怒るし、地元住民や町当局は落胆するほど大騒ぎになっています。

二十一世紀に入った頃、工場等制限法が廃止され、大学の新增設に制限が無くなったこともあり、学生の人気や大学の経営上の問題から、近年はかつて郊外へ移転した大学が少しずつ都心へ回帰してきています。

望ましい傾向なのか否か判断は別れるところですが、都心の過密化を加速する結果になることだけは確かなことです。